

絵巻「はちの木の木」(翻刻)

室木弥太郎

上

上野の國に、佐野の源左ゑもんのせうつねよといふ弓取あり、此人のせんそをくはしくたつぬれは、むかし承平のみかとの御時、さうまの小次郎平のまさかとて、たけきふし有しか、せきのひかしを、わかままにするのみならず、あまつさへ君をはかりたてまつらむとするよし、そのきこえ有て、あめのしたのさはきと成にけり

こゝにまた下野の國に、田原藤太ひてさと申て、名たかきふしあり、是は大しよくはん鎌足大臣の御すゑなり、一とせ江州三上山に、百足のむかてあつて、龍神のかたきとなりしをも、この人そかしたいらけて、すなはち龍宮より、たま物にあつかりたる、そのこゝろかうにして、ちからすくれ、はかりことたくみにして、きりやう世にすくれたるつはものなれは、みかとより、このひてさとをたのみ給て、やかてまさかとをちうせられしなり、その時のけんしやうには、上野しもつけを給り、あまつさへ將軍のせんしをたまはりけり

その子孫も代々、かうみやうせんそにはちす、それより七代にあた

るをは、あしかかのいゑつなとそ申ける、子息二人あり、太郎をはとしつな、次郎をは有つなといふ、としつなか子をは、田原の又大郎たつつなといへり、ちからは八十よ人かちからあり、ひとせたかくらの宮の御むほんあらはれ、宇治河にて、源平のたかひ有しとき、たつつな生年十六にて、宇治河をわたし、敵をほろほし、高名をきはめたり

さてありつなか子息をは、佐野の太郎もつなとそ申ける、これもいとこのたつつなと同じく、宇治河をわたし、十六きのすい一なるか、たつつなが大すけになりしを、さへたるにより、中あしくなりければ、もとつなは平家のをはなれ、せきのひかしにくたりけり

そのころかまくらの大將殿、いまたひやうゑのすけ殿と申て、いつの國の住人、北条四郎時政かもとにおはしましけるを、たのみまいらせければ、すなはちめしつかはせ給けり

たつつなはうんやよはかりけん、平家いくほとなく、龜の木ののはのちり／＼に、波のそこにしつませたまひしかは、本国にくたり、しはし忍びてゐたりしか、こゝに又したの三郎と申て、かまくらとの御

一もんあり、是は六条のはんくはん殿の三なんとそきこえし、たゝつなゑんをもとめ、この人につねくたいめん申けり

絵(一)

有時たゝつな申やう、君はかたしけなくも、清和天皇九代の御すゑ、八まん殿の御孫にておはします、いまの代に源氏となの人、ほんこくにあまたおはしますとも、君ほとけいつたたしき人は候まし、もしおほしめしたつこと候は、それかし一もんひきつれて、みかたにまいるへしとそ申ける

した殿このよしきこしめし、まことにそれかし、よりともにしたかはんこと、むねんには候へとも、八か國に名あるほとふし、ことくくかの手につき候よしきこえつれば、なましひにむほんをおこし候とも、はかくしきみかたもなくてはと、しんたいさためかねて候おりふし、いしくも仰候ものかなとて、さまくのさかなとのへ、手つからしやくをとりなとして、酒をふかくそすゝめられける

たゝつな申やう、せんそひてさとか、まさかをとすゝめて候しとき、かの人わかふようをたのみて、いちみせさりしかは、それよりひてさと平貞盛をすゝめて、まさかをとほろほしけることあり、このたひもたのもしくおほしめさるへしとて、上野國にてむほんおこしけるか、こゝろさしある人々おほかりしかは、ほとなくそのせい三万よきとなり、した殿を大将として、かまくらをさしてせめのほりけり

このことはやうかまくらにきこえければ、すけ殿なのめならすおとろかせ給ひけり、こゝにいままいりの佐野大郎もつな、かまくらとのゝ御まへにまいりて申やう

絵(二)

今度したとのゝ御むほんは、ひとへにあしかゝのたゝつなか、すゝめにて候ときこえ候は、かれも存するむねか候とてなるへし、それかし平家の御手をはなれ、君を御しうにたのみたてまつりしことも、かのものにいこんをほうせんためにて候なれば、こんとの御かせんをは、それかしに仰つけられ候は、まかりむかつて、たゝかひをなし申さむに、ひころたつなかはかりこと、こゝろにくゝも候はねは、すみやかにちうはつつかまつるへしとそ申ける

かまくら殿うちうなつかせ給ひ、よくくゝいくさにはかりことをめくらすへし、くんこうはこうによりておこなはるへしとて、すなはち御おとゝかは殿に、一まんよきをあひそへ、佐野の太郎をいくさふきやうとして、したとのゝせいにそむけられける

敵みかたのつはもの、しもつけの國野木の庄といふところにてゆきあふたり、両ちんかくこのまへなれば、しはらくやあはせして後、たかひにはせみたれ、火を出してそたゝかひける、たゝつなはなひくゝ、わか運をこゝろみると、おもふこゝろのふかりければ、いさゝかもためらはす、こゝをせんとゝ、いとみたゝかひけり、もつなはまた、かまくらとのゝ御まへにて、申つることはつかしさに、一命をかるくし、まつさきにすゝみたゝかひけり

まことに両はう、いづれもはんとうむしや、いくさにてうれんしたる、ものともにて侍しかは、千騎か一きになるまでも、せうふはあらしと見えし處に、たゝつなかうむやつきにけん、大将とたのみまいらせした殿、いくさのなかにはおち行給へり、これを見て、むねとのつはものとも、あしをためかねて、はいくんしけるほとに、たゝつ

な手せい百騎はかりになりしかは、是も野木のやしるへひきこもり、爰にてしはしさへけり

もつなをしよせて申けるは、いかにたつな、なんちは物にもおはえぬものかな、ふるき人のことはに、賢人二君につかへすところいふに、さしも平家の御をんをかうふりたるものゝ、その御手にて死にもせず、かひなき命をなからへつゝ、いま又なましるなるいくさをして、人にうしろを見するは、返々もうき人なり、先祖ひてさとか名をも、御刃一人してうしなふなり、かまくら殿をてきと見まいらせ、いづくにしのひはつへきそ、はや／＼はらをきれとせめければ、たつなたりやつめられけん、一ことの返たうもせず、やたねのつゝくとたゝかはせ、いまはかうよと見えしかは、やしるに火をかけ、はらをそきりたりける、生年は廿一、おしまぬ人はなかりけり

絵 (三)

もつなやかてそのくひをとつて、かまくらとのゝ御めにかけるれは、いしくもつかまつりたりとて、御かんなのめならず、それよりもつなをは、九郎御さうしにつけられ、平家のうつてにのほせらるゝ、四國九國の御かせんにも、かうみやう一二をあらそひ、くんこうかきりなかりしかは、かまくら殿いよくゆゝしきものにおほしめし、御代しつまりてのち、佐野太郎をめされ、なんちかちうしやう、まことにかんの三けつかくひなるへし、いそきけんしやうおこなはんとおほしめし、いかにとのたまへは、太郎かしこまり、上野の大すけは、一命にかけたる所望にて候へは、御ゆるされや候へきと申せは、かまくらとのやかてみけうしよをあそはし、佐野の大郎上野助、ししそん／＼にいたるまで、さういあるへからすとしるし、御判をなしてた

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

まはりけり、時のめんほく、末代のはんしやう、たとへんかたはなかりけり、それより代々、上野國をしよりやうとしてければ、家門のはんしやう、何ことも思ふまゝなり

そのすゑに、さのゝたんしやう経春といふものあり、和田のよしもりむほんの時も、しやうくんの御かたにて、くんちうをいたしたるものなり、その子二人あり、太郎を経光、次郎をはつねよといふ、父つねはるとしおひ、宮つかへもまめならさりしかは、二人のしそくを、かまくらとのへほうこうせさせ、わか身は國にそゐたりける、そのち父いのちつきなんとする時、大すけをは大郎にゆつり、さのゝ庄をは、次郎にそあたへける、さてこそ大郎は大すけといひ、次郎は左衛門のせうと申て、年ひさしく、はくふのほうこう申けり

かゝりけるところに、さかみの國さかわといふ所より、しくれといへる遊女、かまくらにのほりて、こゝかしこへすいさんし、いまやうをうたひなとして、人のこゝろをなくさめけり、大すけこのよしをきゝ、けうあることにやおもひけん、ある夜かのゆうちよをめしよせ、まひなとまはせ、しゆゑんにをよふ

まことに日ころ、人のもてはやすもことほりなり、その故は、てんせいすかたかたち世にすくれたるうへ、はくふんこひをなし、らんしやにほひをそふ、ふよのまなしり、はなのかははせ、たとへはゑにかくとも、筆にもをよひかたし、穂はきの風になひくありさま、みとりの山に、月の出るこそほひにて、華の袖をひる返し、ひんかのこゑをやはらせ、さいうにさつさつの手をさし、まひかなてしありさまは、つたへ聞判官殿の思ひ人、いそのせんしかむすめ、しつか御前と申とも、是にはよもあらしと、見る人ことに、心をうかさぬはなかりけり

さても大すけは、時雨御前のあてなる色に、こゝろあくかれ、ひたすらうちなかめてゐたりけり、時雨はしやくに手をかけ、うちかたふきてゐたるか、そのけしき、おらはおちぬへきはきの露、ひろはゝきえなん、玉さゝのあられよりも、猶あてなれば、いかなるしやけんのあらゑひすも、この人のすかたを見て、心をうかかさぬはよもあらし、ましていはんや大すけか、あたしこゝろのわくかたなさに、思ひ入たるもことはりなり

それよりしのひくにかよふほとに、かいらうとうけつの、わりなき中となりけり、かんくゆかのうへには、はるかに契りを千年の霧にむすひ、ちんしやのむしろのうへには、とをくよはひを万このかめにきして、かたらひしかは、大名小みやうのめされてまいるにも、時々は大すけにこゝろをきてまいらさりけり、大助はわかたちへめすこともあり、また折にふれては、時雨のまへかもとへかよひけり

弟の左衛門つねよ、このよしを見て、ある時兄にむかひ申けるは、いにしへそかの十郎すけなりか、大いその虎に契りをなし、つねくしゆくかよひをしける時、よしもりに行合て、さかつきのろむなし、すてに大事にならんとせしかとも、さすかししたしき中にて候しかは、たかひにをんひんのおもひをなし、わきにをよひけるとなり、それめいよくは、かうてんにあそへとも、せうたにくうつり、きうそうのうれへにおふといへり、さすか大すけとのほとの人、しゆくかよひなんとしたまふこと、むねんの御ことなり、けにく心にかけ給ふとのならは、ひとへにめしをかれよかしと、たひくいけんを申けれとも、その時は、けにとおもへるけしきに見えなから、つるに思ひもとゝまらず、ひはんの日はかならず、かのゆうちよかもとにしのひ入て、い

まやうらうゑいかなてさせ、夜とゝもにしゆえんしてこそ明しけれ
まことにいふはかりなきひしんなれば、大すけにもかきらず、思ひをかくる人におほかりしかとも、かのいせいにやおそれけん、色にあらはすこともなかりしに、いつの國のちう人、くすみのすけといふは、天性ふてきのおのこにて、何ことにてもあれ、こらへぬことをしのふ、おこのものにて候ひしか、しくれのまへを、大すけかしのふといふ事を聞、わざとかれかもとに、大すけかあるときを見すまし、すいさんをしたりけり、日ころきをよひつゝまいりたり、しくれ御前のまひ一手みはやと申入れれば、時雨御前内にゐながら、たゝいまはさらぬまれ人の御入候へは、御たいめんはいかと申出したたり

もとよりことをこのみてきたりしくすみのすけ、このことはを聞、なとかはすこしもこらへぬへき、あそひものゝ身ながら、いまはかなふましなとて、人のよしあしをきらふはくせことなり、いてそのまれ人はたれ人ぞ、これへまいらすは、それかしそれへまいるへしと、あららかにいひ入たれば、時雨のまへせきめんしてそゐたりける、いかさまとて、ことゝはあらし、かれは大みやう、是はゑせものなり、もしけんくはにをよは、かまくら中のさはきなるへしとて、ことのなんきならぬやうにと、人々こゝろをまよはしけり

くす見のすけ、もとよりくせものなるうへ、ちとすいきやうもましりけるか、時雨のまへに、出よくと三度までいひ入しかは、大すけはらをすへかねて、にくきとのはらかことはかな、日比それかし、この所にありといふことはしりぬらん、いかさまおことはゑせものなり、いさくはうけんしつるほとに、たちのやいはかはやきか、こゝろみんとて、二尺七寸の、いかものつくりのたちぬきもち、中門へはしり出ければ、しくれのまへこはいかにとて、たもとにすかりつゝ、め

しつかふ女はうとも、あはてふためき、あしてにすかりをはらひのけて、きつて出たり、くすみのすけはもまぢまうたれは、さんくきにきりあふたり

両はうの侍わかとうともも、五騎三きたちむかつて、せうふをするところに、つるにくすみのすけうたれしかは、大すけもいたてあまたおふて、その夜むなしくなりけり、あさましといふもをろかなりこのことによつて、かまくら中の上下さはきければ、うへさまへもきこしめれ、そのしさいを御たつね有けるに、ちけにんら、ありのまゝに申上たりしかは、くすみのすけはくせものなりとて、しよりやうをめしあけられけり

絵 (四)

又大すけかこと、いまた世つきの子とも、なかりしかは、弟左衛門のせうにそ、ゆいりやうをは給りけり、かくて年月をふるほとに、かの時雨のまへは、此ころ世に人のをもんする、わかさのかみやすむらといふ大名の、思ひ人となりてけり、是はさしもなたかき大みやうなれは、かの女のもとへはおはせず、つねはわかたちへめして、しゆゑんにをよひ、おりくはいまやうたはせなんとして、あそひくらしたまふほとに、そのこと、なく明くれて、はや七とせになりけり

しかるにかのしくれのまへ、所存のほとこそおそろしけれ、そのゆへは先年大すけか、ことにあひしころ、いかなるものゝ子にやありけん、赤子一人もとめ、やういくしけるか、すてに七さいになりけるを、世に大すけか子なりとそひろうしける

ある夜のね覚に、しくれのまへわかさのかみにかたりけるは、わらはこのとし月御内にかしつかれ候なれは、おもふのそもさふらはぬ

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

ところに、ひとつのかなしひあり、かなはぬまでも、せうしてたまはらは申へしと、なくなかきくときければ、やすむら日比むつまじかりつることは、色にも見え候ぬらん、なとやこゝろをきたまふそ、有のまゝにかたり給へと申されければ、しくれのまへ申やう、先年わらはにかゝつて、身をうしなひし人の忘かたみの候か、ことしははや七かとおほえ候、女の身はこゝろにもまかせぬ世のならひにて候へは、その人のなきあととて、とふらふこともつるになし、されはかの忘かたみをひとゝなし、父のほたいをもとはせは、はかりなくとくにて候へければ、父のあとみなくこそかなはずとも、せめて所領一所のぬしとなして給らは、こんしやうの思出、何事か是にたくふへしとてなきければ

わかさのかみ、けにもおやの身として、子をおもふこと男女にかはるところなければ、御こゝろのうち、さこそをしはかりてこそ候へ、かの大すけなくなりし時、子どものさはなかりしかは、そのち上よりの御たつねもなし、まことにその人の忘かたみならんは、たとひおさなしといふとも、父のあとをつかに、なとかさまたける人の候へき、御こゝろやすくおほしめせ、おさなき人をは世にたてて見せ申さんと申されければ、時雨のまへ手をあはせてそよこひける

さてわかさのかみは、あはれこのことさかみのかみとのへ、みつゝに申入はやと、そのおりふしをそまぢ給ひけり、このやすむらと申は、ひとゝせかまくらとの御むほんの御はしめつかた、きぬかさの城にこもりて、いのちをまいらせたりし、みうらの大すけといふものゝひまこ、平六ひやうゑよしむらかちやくしなり、代々くんこうをはけましけるゆへに、その御をんしやうもかたしけなく侍しかは、けんいといひほうろくといひ、天下にかたをならふる人もなし

そのうへむさしのかみやすときたかいの時、さかみの守殿にの給ふやう、天下の大小事、ひとへに此わかさのかみとのに申あはすへし、又わかさのかみにもよくいけんをせられよと、ゆいこんしたまふことなれば、さかみのかみとのも、この人をはをもんし給、いさゝかのことにても、心のゆかぬきたあれば、わかさのかみのもとにいたり給て、しめしあはされけるとかや

去ほとに、ある夜さかみのかみとの、わかさのかみとのゝもとに入給ふ、ていしゆな【め】のならず、よろこひの色をなし、酒肴しゅかうしなゝををつくし、いつよりもてなしかしつきたてまつることねんころなり、れいのことくたゝ二人さしむかひ、みつゝの御物かたりはしまりしかは、みきも手つからそくみたまふ

絵(五)

色々さまゝ御物かたりともはてゝ後、わかさのかみくたんの大助かゆいせきのこと、けんさい七になるなんしの候へは、かのものに給はらは、やすむらか身にをひて、ゆゝしきめんほくなるへしなと、やうゝにとりなし申されければ、さかみのかみとのつくゝときこしめし、さほとのことをも、いまゝてうけ給はらぬこそ口おしけれ、てきてんの子にこそ、父のあとをはつかすることに候へは、しさいにやをよひ候へきとの給ひて、やかてあんとのみけう書をなして給けりさかみのかみとのといふは、將軍の御うしろみとは申ながら、承久よりこのかた、代々天下はさかみのかみとのゝまゝなれば、さやうにあひはからるゝに、政所のひやうちやう衆とてをもき人ゝも、いろいろひさたするにもをよはさりけり

さてやすむらは時雨のまへをめして、かのみけうしよをあたへたま

へは、すなはち是を三度いたゝき、はいけんするに、上野大助のこと経光か実子、あひつゝき拝領すへしとそかゝれたり、やかてかのおさなきものをは、やすむらかまへによひ出し、源八経村となつて、はなやかに出たゝせ、將軍の御まへゝも、やすむらくして参りければ、しよにんもてなすことなめならず

去ほとに源八つねむらは、かまくらとのゝみけうををたいして、はしりて本國へ所知入しけるほとに、かのつねよかわたくし領、佐野の庄八十よかうの所をも、もとより大すけに付たる所領そとて、ことごとく源八くはんりやうし、すなはちきうにんをそつけたりける

左衛門のせうこのよしを見て、おとろき申けるは、このさのゝ庄と申は惣領に付たる所にてはなし、父たん正よりのゆいせきなるを、なんでうみけうそけんちうなりとて、ひきよをかまへて、あふりやうせんとはしたまふそと、さい三ことはりけれとも、わかさのかみかたうとしてとり申うへは、たとひ執權の御まへにてろんするとも、つねよりをえることはあるへからすと見えし、いまはし【たか】や一所けんめいの地もなければ、かまくらへ出仕もせず、わかたちひきこもり、こゝろもおこらぬ道心おこしてゐたりけり

あはれやなこの年ころは、當國のしゆこにて候しかは、十四郡に候ける地とう、頭人、とみん、百姓らにかつかうらにれしうへ、す千人の家子、らうしうをあひしたかへ、す百人の女はう、はしたものをめしつかひ、ふつきはこゝろのまゝにして、くはんらく思ひにまかせしかは、家屋には金銀をかさり、堂上には酒宴をこゝし、いしやうにはれうらをつくし、領食に珍味をとゝのへ、榮華ゑいようこゝろのことくなりしかは、陶朱公かたのしみも、かくやと思ひしところに、所領にはなれて後は、年々におとろへ、日々にましくなりもてゆくは

とに、日ころは左右にへいしうせし郎等も、をんしやうあらされは、つきしたかふよしもなく、前後にいねうせし家人も、ふちむなしければ、立よるたよりもなければ、いつしかいまはくはんくは、（こゝろ）の身となつて、夫婦ならてはたちむかふかけもなく、わか身ならてはあひしたかふ人もなし

むねにむねをならへ、のきに軒をかさね、たんせいをよそほひ、しゆきよをましへしろわかくも、夜の雨にくち、あしたのしもにをかされしかは、いらかもやふれ、とほそもおちたり、垣に苔むし、軒にむくらしけれり、ふくろうせうけいの枝になき、きつねらんきくの草むらにすむ、しん／＼たる林野のことし、米錢のあまりも年／＼にちらしぬれば、すてにくふへき食もなく、らつりやうのめし、しゆんさいのあつ物によはひをのふ、絹布けんぷののこりもおりおりにやふれしかは、たま／＼きるへき衣もなく、あさの衣かみのふすまに身をあた／＼む、（きん）九夏三伏の夏の日（ふし）は、食むなしして、ななき日をくらしかね、玄冬素雪そせつの冬の夜は、ふすまうすふして、さむき夜をあかしかねたり

されはもうこしにも、ひんくうの人はおほかりしにや、許由きよゆといつし人は、水をのむうつは物をなく、手にて結ひのみしとかや、又孫心そんしんといふ人は、よるのふすまもむなしくて、わら／＼そくをたくはへ、ゆふへには是にふしたりけり、そのほか顔淵がんえん原憲げんなんとも、きはめてふかうの人とにや、詩にも

瓢筆ひやうふで屢空草るくそう滋顔淵之巷
藜藿れいこく深鐔雨湿しんせき原憲之圃げんげん

かくはきこゆれとも、これらは賢人君子の名徳にて、とめるをうらやます、まつしくてもうれへす、にこれる世をいとひ、いさきよき道

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

をたのしむ人となれば、いまの代の、とんよくなる人にはたとへかたし、されは左ゑもんつねよは、日にしたかひておとろへゆけは、かくては中／＼ゆひかひなく、恥にをよはむもむねんなり、こひねかしくは南無佛いのちをめせと、かきく／＼こそあはれなれ

この左衛門か身上のみにあらず、かやうのふせうにあふて、国にうれへかなしむものおほかりしかは、下のなけき天にやつうしけん、てんへむちよう物の、さとしなとしきりなれば、かまくら殿おとろかせ給ひつゝ、もろもろのかんなきともを、御所のうちにめされ、いのりともをはしめられけり

絵 (上)

中

將軍家のみたい所は、さかみの守殿の御いもうとにておはします、かりそめの御なやみとて、御年十八と申龜のくれつかた、はかなくならせ給けり、上下のかなしみたとへんかたなし、これやこのほと、さとしなるへしとそいひあへり

さてさかみのかみとのは、けいふくに成たまふほとに、御かたゝかへの御ために、わかさのかみのもとへいらせ給けり、やすむらなのめならすよろこひ、しんでんへ入申で、さま／＼にかしつきたてまつる、またれいのことく御さかつきは出しけれとも、わさと御しやくにつとむる人もなく、ていしゆ御しやくをつとめらる

さけのむまには兩人さしむかひ、みつ／＼の御物かたりともなり、

さかみのかみとの仰けるは、祖父やすときせいきよの時、何こともわかさのかみに申あはせよと、ゆいこんしたまふこと、まさしき一家の人々をはさしをかれ、いかにそやこの人をたのめとはおほせらるゝと、こゝろえす思ひしに、けにもおもへはわさはひは、一もんのなからより、引さんとするこゝろあきらかなり、たのもしからぬ世中なりと、うちしほれ給へは、やすむら仰のこことく、今度なこやとの御むほんのあらはれ候につけて、御こゝろのとけぬは御ことほりにて候、さりながら故右京権大夫殿、とんし給ひけるとき、ときはとのに世をしらせたまつらんとて、かまくらに候人々、故むさしのかみとのを、はからんとしたまへとも、つるにこゝろゆかす、御代はおもひのまゝにむさしのかみとのへまいりたり、そのとき父よしむら、すいふん御方人つかまつりて候、それにつきこんとなこやとの、御ことに、御ためにはそれかし一人こそ、ちうせつものにて候へと申ければ、さかみの守殿、されはこそやすときも、御邊を子にし給ひ、ふかくたのもしき人には、おほしめし入たりなんと、さまゝのさうたんに、小夜もやうゝふけにけり、さてさかみの守殿大とのこもらせたまへは、やすむらもねやに入にけり

そうしてたひのねやにては、めもあはぬものなれば、さかみのかみつやゝまゝともなく、くそくのかな物のをと、まくらひゝくはかり所に、いつくともなく、くそくのかな物のをと、まくらひゝくはかりきこえければ、これにむねうちさはきつゝ、いよいよねもし給はず、いかさまこゝろもとなきことにおほしめし、ひそかに御しん所をしのひ出給ひて、やかたの中をめぐりて見たまふに、いつくもみなねしつまりたるに、ところゝに火はいまたもしてあるもあり、さし入て見たまへは、よろひからひつのををとき、ひきちらしたるていあり、

又ある所には、むまのくらゆみやなとゝりかさねてあり、いかさまいくさもよひのていなり、いまは世もしつかにして、いつくにてきあるへしともおほえぬに、このよういは何ことそや、もし又わたくしの宿意により、かせんすへき所存やあるらん、我かたしけなくも、しつけんをけかす身をもつて、かゝるさうゝしきところに、うちとけあらむこと、たとへはしんゑむにのそむて、はくひやうをふむことくなれば、後代のそしりなるへし、さて又わかさのかみに、かくともしらせす、しのひ出は、なかきうらみともなり、おくひやうものなんとゝ、あさけるへけれとも、それは大ことのまへの小事なり、たゝ衣（きぬ）またふするにはしかしとて、しのゝめのほとにそ、わか御やかたにかへらせ給けり

すてにその夜も明ければ、さかみのかみとの、やすむらかもとより、今夜しのひてかへらせたまふといふこと、かまくら中にひろうありければ、何こととはしらす、物さはかしくて、民のこゝろもやすからざりしに、又あふしうより、はやむまをたてゝ、きうをつくることあり、何ことにやと諸人玉しるをひやす處に、つかのる浦に、人のかたちしたる大魚、しゝてなかれよる、うみの色へんして、あかきことちのことし、せんきすてに両度、みなもつてひやうらのきさしなりとそ申ける

當時たれやの人かむほんをおこし、ひやうらんにをよふへきと、人々あやしく思ふ處に、又ある日相州わかみやへ御参詣ありけるに、いしはしのへんに、らくしよをたてたり、立よりて見給へは、みうらのやすむら、相州の一家をほろ（はろ）ひし、みつから天下をはからふへしとて、ないゝはかりことをめくらし候、御心得のために、かく申なりとそ書たりける

絵 (一)

是はいかさま、かの一もんことくしく、世にさかふることを、め
さましく思ふものゝ、しわざにてそあるらん、おこかましきしわざな
りとて、すなはちふたをはとらせてかへり給

やすむらは、さかみのかみとのゝ、にけかへらせ給しのは、世を
やあやふみけん、出仕をとめて、ろうきよしたりしか、又らくしよ
のひろうなんとありしかは、いまはのかるましき時節の、きたりてこ
そは候らめ、よし／＼ちからなきこと、さうしうよりうつ手をむけ給
は、しかいをすへしと思ひきりてそゐたりける

こゝに又相州のけしやくに、秋田^{あきた}しやうのすけよしかけといふ人あ
り、是はひやうゑのすけとの御むほんの御時、廻文^{くわいぶん}の御つかひつとめ
たりし、あたち藤九郎もりななか孫、城助かけもりか子なり

父ははや出家して、高野山にひきこもりてゐたりしか、かまぐらの
こともおほつかなしと思けん、今夜にはかに来りたり、しそくよし
かけたいめんして、すなはちわかさのかみかふきのこと、またはわか
宮のらくしよのことなど、くはしく物かたりしければ、父の入道聞も
あへず、さほとの大事のあらはれ候を、いまた御とかめもなきかとそ
いひける

されはさかみのかみとの、いまたともかくも御ことはをいたし給は
ぬにより、一門外様の人ともさしてさたました^{はなした}す、すいふんみな
／＼、かのいせいにおそろゝと見えて候へは、世中あやうく候とそ申
ける

入道なんちらさかみのかみとのゝはくふとして、せんそより代々ち
うせつをつくしたてまつりぬれば、かのものにをさるへくはなけれと

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

も、玉しゐのにふきにより、人に人とも思はれぬそかし、かくてはつ
るにかのものゝ、くつをもとるへきことこそ口おしけれとて、大きに
いかりければ、よしかけせきめんしてそ候ける

このしやうのすけかしゆくしよは、たまないといふところにありけ
るか、ある朝より宿所^{しゆくじよ}より、しらはた一ななれいてゝ、へんほんとし
てこくうにあかりけるこそふしきなれ

絵 (二)

さかみのかみとの、このよしを御らんして、なひ／＼おもふところ
とは、あんにさういしたるものかな、此きすいはいかさま、しやうの
すけむほんをおこすへききさしなるへし、それにつきこんと、わかさ
のかみとのかしゆくしよをしのひ出たること、年ころのよしみを忘る
ゝににたれば、さこそ恨みふかゝるへし、なかんつくわか宮のらくし
よも、あとかたちなきそらことなるへしとおほしめせは、むまのせう
といふ人を御つかひにて、わかさのかみかもとへ、わほくをなしたま
ふ御せうそくをは、相州しひつにあそはしけるか、今度のふるまひ、
人のさんけんによるといひながら、さこそ日ころのけいやくにもたか
ひ、ひきよのしわざにおもひ給ふらん、よし／＼何ことも無やく、今
口わほくのうへは、子々孫々にいたるまで、いへんあるましきとのせ
い状をそあそはしける

絵 (三)

さかみのかみとのゝ御母は、城助入道かむすめにておはしければ、
ひそかにこのことをつけ給ひけり、入道大きにおとろき、しそくよし
かけをよひて、たゞいまさうしうよりやすむらかもとへ、わほくのよ

しの御つかひを給るときこゆ、これ後のわさはひとおほゆれは、當家より思ひたち、両はうのうんをもこゝろみ^{【こゝろ】}へし、汝はさかみのかみとのへまいりて申へきやうは、わかさかみ^{【の親方】}むほんをおこし、さうしうをうしなひ奉らんとするよし、たゞいま人のつけて候か、いまた御存知候はずや、いそきうつてを給るへきよし申せ、といひつかはしけり

よしかけすなはち、物のくきらひやかにして、さうしうへまいりければ、こは何ことそとて、おとろかせたまふ、この人はさうしうの母かたのおちなれば、いきほひ人にこえて、世のをもんすることなめならず、されは何のはかりもなく、相州の御まへにまいり、父の入道か申せしとをりを、くはしく申上ければ

相州いせんにもさやうのことを人の申つれとも、さらにまことゝも存候はず、そのゆへは、かの一もんもつてのほかに世にひいて候ほとに、さためてへんしうする人の、いひきたにて候へしとの給ひけり
よしかけかさねて申やう、これは御ことはとも存せず、むほん人のけうみやうまで、たしかに聞て申候を、御うたかひ候は、御うんのすゑにて候へし、けに／＼さも候は、まつそれかし一人、わたくしのいしゆあるていにて、かのたちへをしよせ候へし、その時かのものゝむほんまことならば、よりきの人しゆ、はせくゝり、ふせきたゝかふこと候はん、実否を御らんし候へやと、申すてゝそ出にけり

やかてそれよりよしかけは、手勢五十きあひくし、しらはたきつとさしあげ、しゆく所をうつて出ければ、すはや城助かむほんおこしぬるは、いせんのすいさうはかやうの先兆にこそとて、かまくら中のさうとうなのめならず、みな／＼東西にそまとひける

よしかけやかて、やすむらかたちにしよせ、むほんのくはたてあるよしきこしめし、將軍よりうつてを給たりとよはゝりければ、やす

むら大きにおとろき、さては今日のわはくは、相州われをたはかりたまふにこそ、返さもきたなきしわさかな、この上はいつのためにいのちもおしむへき、ふせきやいて、しんしやうにはらをきれやとけちしければ、弟のとのかみ光むら、同式部大夫いゑむら、五郎左衛門すけむら、七郎左衛門しけむら以下の一もん、うつて出てたゝかひけり

爰にもりの蔵人入道といふは、やすむらかいもうとむこにて候へは、みつひろいけのしそくをあひくし、やすむらかかたへそくはゝりける、そのほか大すみのかみしけすみは、やすむらかおちなれば、これも子ともをくしてくはゝりぬ

さて又平判官よしあり、佐原十郎左衛門か一そく、長江次郎さゑもん、うつのみやまさかのかみ、かすかへかひのかみ、せきの左ゑもん、ひらつか左衛門、はにふの次郎、かつさの権助、長尾平内、秋庭の次郎、たちはなの大せん、よたのひやうゑ、大すか八郎、をかさはら七郎、ひちかた次郎、さぬきの三郎、いなけの平次、うす井太郎、はたのゝむまのせう、いした九郎、さのゝ源八、をかもとみんふをはしめとして、むねとの人ゝ二百よ人、そのせい三千よきにて、やすむらかせいにくはゝりければ、城助なんきにをよひける處に、さうしよ^{【さうしよ】}り、なこや備前のかみ時長を大将として、五千よきをさしむけて、せめさせたまふほとに、両方たかひに、やたねつくるまでたゝかひけり
かゝりけるところに、よしかけかはかりことにて、わかさのかみか、みなみのさいけに、火をかけたなり、おりふし風はけしく吹しおり、やすむらかたちに、火もえつきけるほとに、こもるところの軍勢とも、しんたいをしかねつゝ、法華堂にはせ入れれば、御家人ら、をつつめかけて、せめたゝかふ

絵(四)

その中によしかけ、まつさきにすゝんて申けるは、相州を敵にうけ奉り、いつくへにけは命たすかるへきそ、はや／＼腹をきれとそよはゝりける

のとのかみ光村、このよしを聞、われら相州にたいし、武心はなかりしかとも、わなかさんけんによつて、かやうの躰とまかりなりたり、日比は人のうへと思ひしことの、けふは我身のうへにきたりたり、わ人ともゝ、よそことと思ふなよ、たゞいまにおもひしらすへし、といひもはてす、はらかききつてしにければ、わかさのかみも、同じくしかいをしたりけり

これを見て、三うら又太郎氏むら、かけむら、こまわう丸などをはしめとして、一もんたもん五百よ人、おの／＼しかいしけるそむさんなる

絵(五)

かくていくさはやみければ、ほとなく世中しつまりけり、さかみのかみ殿なひ／＼おほしめしけるは、なにこともさたまれる時節といひながら、わかさのかみか、もろくほろひぬこそそむさんなれ、もしもその人につみなくは、さしも武州御いとおしみふかゝりし御ことなれば、草のかけにても、さこそ恨みたまふらめと、つねはらくるいし給ひけり

せめてはかの人々のほたいをとふらひ、善所へをもむかせたくおほしめし、建長寺とていかめしき寺をこんりうあり、開山には蘭溪和尚とて、いくより来朝したる禪僧をすへられ、すなはちくやうをとけ

絵巻「はちの木」(翻刻)(室木弥太郎)

られたり

和尚この寺のちうしとして、もつはら禪宗をひろむるほとに、相州もやかてせんしうとならせたまひ、御まつりことのひまには、三学をつとめたまふそ有かたき、是よりしてこそ閑東に、せんしうさかにひろまりけり

抑さかみのかみ時頼と申は、北条四郎時政より五代の孫、むさしのせんしやす時の孫、しゆりすけ時氏の子なり、みなかみを申せは、くはんむ天王のわうし、葛原親王の御すゑなれと、ひたすらのたみとなりくたりしに、かの時政故右大將殿の御うしろみとなりしより、いせい天下にならふかたなくなりけるうへ、せうきうのみかと、よしなき御むほんをおこし玉ひ、よしときにうちまけたまひてのちは、かの子孫天下をわかまゝにしたかへしかは、尺地もその有にあらすといふことなく、一家にその民にあらすといふことなし

されとも武威をほしまゝにせず、將軍とてあるは君たち、あるはみやたちを上にするへ、わか身はしつけんとして下にゐて、まつりことをおこなへは、国々そのいましめをおかさす、守護けんたんのほかにいろはす、地頭領家をあなとることなし、そのうへむさしのせんしやすとき、日本國の大田文をつくり、庄郷をわかち、五十一かてうのしきもくをさためて、さいきよにとゝこほらす、上あつて法をやふらされは、下又いましめをおかすことなし、されは世おさまり、たみすなほなりし、よそほひつたへ聞、堯舜の御代にもおとるましくそ見えし

いまのときよりも、まさしきかの孫なれば、その風をしたひ、そのとくをほとこすにあまねく、人のうらみもなく、もつはら世もゆたかなり、されともなを政道に、こゝろさしふかゝりけるにや、あるとき三学のひまに、和尚にむかつて、國をおさめ、たみをやすんする

方便はいかんととひ給へは、無欲とあいみんとの二なりとそこたへける

相州その時のたまはく、同じくはことほりをつふさにのへ給へ、和尚いはく、夫大欲は乱のもとひ、わさはひのみなもととなり、相州此りをして、むよくにならんとおもひ給はく、万人をつから、よくしんうすらくへし、人のよくふかきせうあらは、御身のよくの、いまたふかきゆへとおほしめせ、こゝをもつて故人も申をかれたり、そのみすくにして、かけまからすと、たとへはもろこしに、周の文王とて無よくの君子あり、又虞公芮公とて、大よくのしよこうあり、この二人のきみ、わつかなる境をろんして、そのひはんをせんために、周の國へきたりたまふに、かの國のたみとも畔をゆつることあり、くろをゆつるとは、わか田のさかひを人にゆつることとなり、いまの代の人ばかりそめにも、人の物をかすめとらんとこそはするに、わか物を人のものなりとて、両はうろんすることやさしけれ

絵 (一六)

虞芮の二君このよしを御らんして、あのいやしきたみに畔をゆつるそかし、われら一國の君として、わつかの境をろんすること、時のちちよく、末代のそしりなるへしとのたまひ、両方たかひにわくして、本國へかへられけり、是文王一人むよくなるにより、その國のたみは申にをよはす、たこくの君までむよくなり、されはそのとくによつて、四百よ州のぬしとなり、子孫八百よねんをたまちしなり

さて又かの文王の祖父に、大王といふ人あり、幽といふところにおはしけるを、りんこくのゑひすともおこりて、うちとらんとするほとに、大王かすくのたからをおくり、礼をなし給へとも、ゑひすなを

ゆるさす、はや／＼國をさつて出へし、さなくは大勢をもてせむへきよしを申ければ、大王のたみとも、これを聞、なにとて大王ゑひすに和をこひたまふそ、かれらせめよせば、われら命を捨てたゝかふへし、あなかちをそれたまふへからすとそ申ける

大王このよしきこしめし、けに／＼なんちらかこゝろさしは、せつなれとも、われ國をおしく思ふも、なんちらをおもふゆへなり、かれとたゝかひをなさば、おほくの民をこらすへし、やしなはんための地をおしみ、やしなふへきたみをうしなひては、何のゑきかあるへき、しらすりんこくのゑひすとも、もしわれよりあいみんふかかは、たみのよろこひなるへし、われをのみ主とせんやとて、ひんの地をゑひすにあたへ、大王は岐山のふもとへにけさつて、ゆうせんとしてそる玉ひける

ひんの地のたみともは、かゝるありかたき賢君に、はなれたてまつり、あに礼儀もわきまへす、仁儀もしらぬ我に、したかふへしやとて、子弟老弱引つれ、きさむのふもとにきたりつゝ、大王につきしかかひしかは、ゑひすはをのれとほろひはて、大王の子孫つるに天下をおさめたまふ、文王武王是なり

それ君は、たみをもつて体とし玉ふともいへり、君またほうあくにして、たみをなやませは、そのうれへ天にのほり、さいへんとなり、國土みたるゝものなり、されは湯王は火に身をなけ、桃林の社にまつり、太宗は蝗をのんで、命を園囿の間にまかず、これらは身をせめて、てんいかなひ、たみをなてゝ、地聲をかへりみ給ふものなり、こゝをもて白樂天も、王者のくらくは衆とおなしかれと、かきをきて候と、くはしくかたりたまへは、さうしうふかくかんしむしたまふやかて天下のしつけんをは、ときは左京大夫政村、しほ田むさしの

かみ長時^{ながとき}兩人にゆつりたまふ、わか御身は、山の内といふところに、
最明寺と申てらをたて、かしこにうつらせ玉ひて、やかて出家をし給
けり、御名をは道崇とそ申ける

いまたさかんの御身にて、いつしかなる御ことゝ、かたふき申やか
らも、おほかりしかとも、さすかたゝ人にておはしまさねは、ふかき
御こゝろあるへし、されは庄^{（盛）}禅三学をのみ、もつはらし給へは、政
道はよそのことに見たまへとも、さすか天下のあるしとして、折々い
けんなとし給ぬ、まことにありかたき世のかためなり

一人たゝしければ、万人これにしたかひつゝ、うろんのさはさら
になし、そのうへまさむら、長時二人のともから、しつげんにゑらみ
出さるゝほとの人なれば、すいふん正直にして、いさゝかもわたくし
なきことを思ふ

もしふんみやうならぬ、せせう出来る時は、れんちよくの中に、ろ
んなしといへは、なんちらか間に、一方はさためてよこしまなるへ
し、いつの日せうせきをたゝし、かんほうの方をは、たちまちつみ
おこなふへし、かたましきもの一人国にあれば、万人のわさはひと
なるなれば、天下のかたきこれにすくへからず、といかられければ、両
はうこのよしを承り、いか様ひかことあらは、いかなるめにもあはせ
らるへし、とおそろをなし、各かへりて後、あるひはわたしし、或は
ひかことと思ふかたは、みつからまけなとして、せせうをはやめにけ
り、およそ無よくなる人をしやうし、よくふかきとのをはつかしめた
まふほとに、怠ても人をかすめんとするやからはなかりけり

さても最明寺のせんもん^{（せんもん）}、御身はさながら佛道にをもむき玉ふとい
へとも、御こゝろはひたつら政事をおほしめせは、あたにも一疲一休
をやすくし給はず、一身をおさめたまふは、万人をなてんとの方便な

るうへ、なをもとをきさかひ、かたほとりに、いかなる無道のものあ
りてか、所領をかすめ人民をなやますらん、みつからしよ国をめく
り、ちきにうれへをも、きかはやとおほしめし、ひそかに御かたちを
やつし、六十よしうを、あまねく修行し玉ひけり

絵 (七)

一日二日のほとなれとも、旅にすきたるあはれはなし、いはんや煙霞^{（えんか）}
萬里の道のすゑ、さこそ物うきふしならめ、ふかき山路にゆきくれて
は、苔のむしろに露をしき、とをき野原を分わひては、草の枕にしも
を結ふ、渡口に船をよんてたち、山頭に道をうしなふてかへる、まし
て煙蓑^{（えんさ）}雨笠^{（あまがさ）}破草鞋^{（やぐさ）}の底、うれへならずといふことなし、天下をたなこ
ゝろににきり、富貴思ひにしたかふ人の、このむて修行したまふには
あらず、ひとへに理世安民^{（りせいあんみん）}のためなれば、かの佛のなんきやう苦行に
もこえて、有かたかりしくとくなり

下

さてもかの佐野源左ゑもんのせうは、年月のうつりかはるにしたか
ひ、からくともしきめをのみ見たまひけるか、いまはことさら冬の
空、雪は山のことくにふりみちて、よものあらしはけしく、さむきた
とへんかたもなければ、夫婦ともになくよりほかのことはなし

ある夜女はうつねよにかたり給けるは、たゝいますこしまとろみつ
るに、ふしきのゆめをかんして候、かやうのめてたき夢をは、そこつ
にはかたらぬことゝ申せは、三日すきてかたり申へし、何様とのゝ世

に出給はん、すいさうのやうにおほえ候と申されければ、つねよ此よしを聞、御夢のことはさはしらす、それかし世に出んことは、枯たる木草に、花咲候はんよりもまれなることにて候へしとて、からくそわらはれける

その三日にあたる日のくれつかた、ことさら雪おひたしくふりけるに、修行者一人たちより、やとをからはやとの給へは、内より女はうたち出、大雪にあひたまふ御ありさま、いたはしく候ほとに、御やとをまいらせたく候へ共、われらふうふさへすみかね候あはらやに、いかてかとまり給ふへき、いまた日もたかく候へは、あの山もとのさとまで、雪をしのき御いりあれ、そこにはなんはうめてたき、御やとの候とそ申されける

絵 (一)

叡明寺殿このよしきこしめし、たとひあはらやにて候とも、一夜をあかさせたまはれかし、この大雪に、いかてか山もとまでもしのき候へきと、うちわひ給へは、さらはあるしにそのよしを申さんとて内に入、さゑもんにかくときこゆれば、さいせん女の申ことく、われら二人さへすみかね候うへは、中々おやとをば、参らせかたふ候と申せは、さてはよしなき所に、立よりて候ものかなとて、すてにたち出給ひしとき

女はう申されけるは、われらかやうにあさましき身となり候ことも、さきの世にて、しひのころなかりしゆへなり、せめてはかやうの修行しやに、一夜のおやとをまいらせつゝ、後の世のたよりともし玉へかしと申されければ、けにく是は御ことほりなり、さらはとめ給へと申けり

女はうよろこひはしり出、御有さまを見たてまつれば、あまりにいたはしく候ほとに、さもみくるしく候へとも、御とまり候へしと申せは、禪門のめならすおほしめし、やかてかへり入たまふ

もとより夫婦ならて、めしつかふ人もなかりしかは、女はうてつから、いひかしくていに見えけるか、かひくしくは有なから、いまたかやうのわさに、なれたる人ともみえねは、せんもん涙にむせひておはします所へ、ていしゆせんをもち出、しゆきやうしやの御まへへすへ申けり、見たまへはあはの飯なり、是はめつらしき物にこそとて、なのめならすしやうくはんし給けり

さゑもん申けるは、それかし世にありしときは、このあはいひなんと申ものを、人々の哥により、詩につくらせ給ふをこそ承て候つるに、いまはかやうにおとろへて候へは、かやうのものにそいのちをもつき候なれ、つたへ聞もろこしの盧生は、あはいひかしくそのほとに、五十年の榮花をゆめに見たるとなり、それかしもせて、夢になりともむかしを見るならば、すこしはなくさひ候へき物とて、ひたゝれの袖を、かほにをしあてければ、せんもんもあはれにおほしめし、そゝろに涙をなかされけり

絵 (二)

日もくれ、夜に入ければ、雪はいとしく降けるに、軒はこほれ、かきはやふれし、あはらやなれば、山かせ河風吹すかし、ねられぬへくもなければ、修行者もふしわひてそおはしける、さゑもんこよひはことにさむく候に、しゆきやうしやへ、たき火をして、あて申たけれども、左様のものもなしとて、うちわひける時、女はうとしころはちの木とて、ほんそうしたまふ樹木をは、いつのためにたはひたま

ふ、こんやの御もてなしに、かの鉢木をたきたまへと申されけり

左衛門のせう是を聞、仰のこづくの鉢木は、それかしひさうせし物にて候へとも、御僧のために候へは、いかてかおしみ候へきとて、木のもとに立より見れば、まつ冬の中より咲そむる、大度嶺の梅の花、いつにすくれてこの冬は、雪ほうしてさむけれとも、時を忘れぬ華の香は、けにも鶏舌をふくめり

抑この木を好分木と名つけつゝ、いこくにはなをてうあひせり、その故は唐の太宗ふんかくをさかんにおこなはれしかは、庭上の梅華いつよりも色をかきり、にほひをまして咲けるか、太宗の後やうく文道すたれしかは、花の色香もあさかりしなり、さてこそ好文木とは名つけ給ふとなり、わか朝には難波の梅とひ梅あふしゆはいなと申て、その名をえたる華木なり、さくらは花のつかさなれば、詩哥の中にももつはら^{はら}もつはらこれをほめたり、されは唐人の句に、花上苑にあきらかなり、惶軒九陌のちりにはつすとつくり、又はるかに人家を見て、花あればすなはち入とも聞えたり、さてわか朝の詞人の詠にも、

花ゆへにひとやりならぬ野辺に出て

こゝろのかきりつくしつるかな

春風は華のあたりをよきて吹

こゝろつからやうつろふと見る

この花むかしは、わか朝になかりけるにや、唐の花山より華のたねをわたされ、はしめて吉野山にそうへられける、そのうちなちの都のやへさくら、しほかまのやへひとへなんといふ、さまぐの名花は出きたりとかや

さて松はときは木なれば、まつもつてめてたき木なり、されは千とせをのふる蘘も、松にすをくふとこそは申なれ、そのうへ此松は、秦

始皇の御爵にあつかり、大夫といふつかさあれば、よほくにすくれたる名木なり、玄冬そせつのさむきあしたにも、松君子のとくをあらはすとて、貞木とも名付たり

凡千草万木おほき中に、ことさらにこの三木は、北野の天神いまた菅丞相と申し御時より、御てうあいの御ことなれば、いま神木と人のあかめたまふ物を、むたむたときりて煙となさは、神もいかおほすらん、よし法のなれば、ゆるしたまへといひあへす、ふりつむ雪をはらひすて、きるこそむさんなりけれ

絵 (三)

せんもんこのよし御らんして、なにとてかほとたへに見え候、しゆほくともを、情なくきり捨てたまふそ、今夜のさむさはともかくも明し候へし、しせん又おこと世に出たまふものならば、かならず後悔したまふへし、よしなきことゝせいし給へは、左ゑもんそれかしもと世に候し時は、このほかあまたのめいほくともうへならへ、かの廬山湘湖の風景も、いたらされは見ることなし、瓊樹瑤池の絶境も、みゝにふれてうるることなければ、我前載のけしきこそおもしろけれと、愛執をなして候へとも、かやうに貧窮ことくの身軀と、まかりなりて候へは、うへ木ともゝいつとなくうせはてゝ、わつかこの木になりて候、是はすいふんひさうの木にて候へとも、これを法のたき木となし、御僧にあたらせ申へしとて、すなはちたき火にそたきにける、有かたかりしこゝろさしなり

せんもん仰けるは、あるしの御すみかを見申に、あれはてゝは候へとも、さしもむかしはいかめしきていと見えたり、いかる人にて候へは、かやうにすいひしたまふそととひ玉へは、さゑもんのせう、いや

くわれらは名字もなきものにて候と申されけるに、かさねて御名字のなきことは候まし、なとやつませ給ふそとのたまへは、女はうなくく、是こそ佐野の源左衛門つねよのはてにて候そとたへ申けりせんもん仰けるは、それかし世すて人といひながら、京かまくらにっねはあしをとゝむれは、大みやう小名の御こと、かたのことく存し、さてもさのゝ源左衛門殿は、八十よかうのぬしにて、かくれなき侍、うとくの人とこそ聞えつるに、何とて散々の身躰とは、御なり候やとのたまへは

そのときゑもん、仰のことくそれかしは、父たん正よりこのところをゆつりえて、ふそくもなき身にて候しを、舎兄にて候大助横死にあひ候とき、大助か所領を、しはらくそれかしにあつけをかせられ候處に、かの大助か契りをなしし、時雨のまへと申女、いつくともなき子をやしなひ、大助か子なりとひろうして、わかさのかみをたのみ、大助か所領をとり返しけるとき、かまくら殿の仰なり、御けうそありなと申て、それかしの所領八十よかうをも、をさへてとりて候へは、木をはなれたるさる、くかにかれる魚のことく、世になしものとなりて候へは、ふたい家人も、ふちすへきたよりなさに、みなくうしなひはて、いまはわつかに夫婦のもの、ひんくうことくの身となりて、あさの衣のあさましく、かきものしはくも、なからふへき心地もなければ、袖のみぬれて露の身の、消ぬほとゝて世をわたる、あさけのけふりのこゝろほそさ、おほしめしやらせ給へとて、夫婦は袖をそしほりける

せんもんもさすかあはれにて、さてくかやうのりをもち給ながら、なとやせうはしたまはぬそ、上にはゆめく、かやうの道理をはしるしめすまし、さためてやすむらかおもふまゝに申かすめて、あひは

からひたるにてそ候らめ、左様にわんさんをかまふれば、人のうらみのつもりきて、いまはかの人のおとも、たえたるところうけたまはれ、このことをひて思ひ捨てたまふな、かまへてせうし給へ、さいはひにこの僧も、公方にゑんをもちて候へは、たよにもなり申へきものをとのたまへは

仰はさる御事なれとも、馬やせてはけなく、いはゆるにちからなし、人まとしくなりては、智みしかく、ことはいやししと、故人も申されて候へは、このありさまにて、せうたてを申とも、とてもすいきよかなふましと、思ひきりて候なり、せんそ佐野の大郎もとなか、かまくら殿へちうせつをつかうまつり、はしめて家をおこして候しよりこのかた、代々弓やをとつて五代、みなもつて君へちうせつをなさすといふことなし、しかるにそれかしか代となりて、家のほろひんと、なんはう無念に候へとも、よしく定まれる時節そと、れうけんつかまつり候なり

去なからかやうの身となりても、存するむねは候なり、いかんとなれば、しせんたゝいまも、かまくら殿の御大事とて、國々よりつはものをめさるゝことあらは、人よりさきにはせ参し、かたきはたとひ、はんくはいほとんたけきものかむかふとも、一はんにかけむかひ、おもふまゝに名をのこさむとこそ存候へ、まことにそれかしかにいて、かやうのことを申せば、老驥の千里をおもふやうに、おかしくおほしめし候はんつれとも、御らん候へ、これによるひ一両、さひたれとも長刀一ふり、やせたれともむま一ひきもちて候、これはしせん御大事とあらは、御やくにたゝんそのために、たしなみをきて候ものをとて、むまの口をとり、馬引出し、修行しやにそ見せまいらせける

絵(四)

せんもん、まことにたのもしき御ころさしなり、されは太神宮の御たくせむにも、正直はいつたんのゑこにあらず、つゐには日月のあはれみをかうふるとあそはして候へは、すゑたのもしくおほしめし候へ、いかさま世に出給はん人なりなど、やう／＼になくさめたまひ、さて雪もすこし晴けるほとに、修行の道に出たまふ

あるしの夫婦、なこりをおしみまいらせ、いますこし雪をもはらし給へと申されしかとも、かくてなからへはつへき旅ならず、修行といふことは、ころにまかせぬ道にて候へは、まづこの度はいとま申、又こそまいり申へけれ、もしかまくらへ御のほりあらは、それかしかもとを、御たつねあれとのたまひて、たひの道に出たまへは、あるしふうふは、御名こりをおしみつゝ、御うしろかけのかくるゝまで、見をくりつゝ、なく／＼わかやにかへられけり

女はう、さゑもん尉にきこえけるは、こんやのしゆきやうしやは、たゞ人にてはおはすましき、さためて佛神三ほうの、われらかゆへもなくをとろへしことを、ふひんにおほしめして、やうかうならせたまふかと思ひまいらせ候、そのゆへはひとひも申こく、その夜のゆめに、八しゆんにあまれる老僧の、かうそめの衣、同じけさをかけ玉ひ、すいしやうのすゝつまくり、このやのうちにいらせたまひ、御ふところより、くれなるのあふきを一本とり出し、みつからに給りて、かきけすやうにうせたまふ、ゆめ心にも、あまりにふしきにおほえ、かのあふきをひらきて見れば、こんしきのもしにて、正直は一旦の依怙にあらず、終には日月のあはれみをかうふると有、朝是をさゑもん殿にまいらせたれば、うちひらき四方をまねかせたまふほとに、日

絵巻「はちの木」(翻刻)(室木弥太郎)

ころめしつかひ玉ひし、いゑのこらうとう、はら／＼とはせきたり、一めんにはせならふ、しんでんには七ちん万ほう、山のことくにみち／＼たり、是はいかにとあきれてそ、ゆめはさめて候へ、さてこそよき夢見て候ほとに、三日すきてかたり申さんと申せしに、三日といふ日、しゆきやうしやきたり給ひ、御ことはこそおほからめ、あふきにありし御たくせんの文を、の玉ひしこそふしきなれ、いか様夢はまさゆめなるへし、たのもしく思しめせとかたりたまへは、さてはめてたき御ことなりとさゑもんも、ころに悦をまつやうにそ思はれける

去ほとに叡明寺のせんもんは、國々修行おはりければ、かまくらにそ返られける、さて尾藤左近をめされて、我修行の次に、くに／＼にて見をきしことあれば、東八か國のつはものをめすへし、おもふしさいありとのたまへは、うけたまはると申て、あるひはしゆこ、けんたん、ちとう、りやうけにつけて、このよしをふれめくらすほとに、八か國のつはものとも、をとろきさはき、われさきに／＼とそはせのほりける

吹風もうららかに、立波もしつかなれば、しよにんあんとおもひをなしつるに、何事のおこりて、たゞいまくんせいをはめさるゝそや、おほろけにては、ものさはきし給はぬ人の、にはかにかくはからひたまふは、さてめてしよく修行の時、むほんすへきやからを見とかめて、只今かくはのたまふかと、かまくら中の上下、やすきころもなかりしかは、しさいさつくをとりかくし、東西なんほくへちり／＼に、あはてふためきにけゆきけり

絵(五)

さて國々より、のほりあつまる兵には、まつさかみの國には、山のうちの一そく、由井、堂か井、なかる、なり山、たか柳、三浦たうに

は、和田、岡崎、さはら、大多和、あしな、むつら、そのほかゑひな、はた野の人々、伊豆國には、かのくすけ、工藤助、うさみ、くすみ、とひ、つちや、とよた、あいかう、むさしには、あたち、とよしま、ひき、おき野、ちふ、河こえ、江戸、かさ井、しふや、庄司たうの人には、よこ山、こたま、ゐのまた、むら山、かねこ、ひら山、くまかへ、そのほか久下の権守、長井の庄司、別府のすけをはしめとして百八十人、あはのくに、は、あんさい、かなまり、かつさには、天羽の庄司、しもふさには、千葉助、さうま、大すか、たけいし、ゆふきの人々、ひたちの國には、まかへのしやうし、中宮大郎、関の左ゑもん、上野には、名波助、新田一門、さとみ、大嶋、ほり口、田中、たけはやし、世良田、ぬかた、そのほかうす井源太、たこの若當、さの、源左衛門、しもつけの國に、うつ宮、やた、をやま、なかぬま、はか、しほのや、なすの太郎をはしめとして、むねとの人々は千人、つかう三万よきとそしるしける

最明寺殿は、ちやくたうのおもてを、よくし御らんして仰ける、かうつけの國よりのほるせいのの中に、さの、源左ゑもんつねよとて、年のほと四十はかりのおとこの、長刀をひつさけ、くろきむまを、じゝんひかへてのつたるむしやあるへし、めしてまいれとの御ちやうなり左近このよしうけ給、しよくんせいのその中を、かきわけをしわけ見まはせは、あるひはきんくをのへたる、よろひはらまき、こかねつくりのたちかたな、かひにかうたる名馬ともに、とねり七八人五三人つゝひかへさせ、たうまぢくいのことくなみるたるか、これそ源左衛門よとおほしきはまれなりけり

こゝにとさふらひをすきて、ひらもんの外にむしやあまた有、その中にとしのころ四十はかりのおとこ、くろきむまをしゝんひかへてゐ

たり、すなはち御ちやうなり、いそき御まへにまいられよと申ければ、つねよ思はすけにて、それかしかことにては候まし、人たかへにてや候らんと、さい三したいしりたりけり、左近いやくその方の御ことにて候、いそきまいられよとあらけなく申けり

つねよつらゝ思ひめぐらすに、それかしかことをさんし申ものゝあつて、たゝいま御前にめし出され、きうめいせらるゝにこそ、よしゝそれもちからなし、たとひくひをめさるゝとも、もとよりのちを捨て、せんちやうにをもむかん所存にて、これまてまいるうへは、引とものかるましきところにあらずと、あんしすまし、御せんをさしてまいりつゝ、そこらのほとを見めぐらせは、こんとのはやうちに、のほりあつまる兵、庭上にひしとみるたり

さて堂上にはさかみ殿、御一家にはなこやとの、ときは殿、しほたとの、こまち、さくら田、江ま、しほた、さかゐ、かなさは、あそのたんしやう殿、外様の衆には、まつあしかゝとの、御一もん、につき、ほそ河、はたけ山、一色、いは松、もゝの井殿、さては城助、すた、たかはし、長崎入道、まことにきらほしのことくなみる玉ふその中をつねよか、人にかはりたるふせいにて、はゝかるけしきもなくとをり行、御まへにしようしければ、ゆゝしのとのやとほむる人もあり、又おちふれたるすかたを見て、わらふやからもおほかりけり

絵(六)

最明寺との、つねよにむかつて、なんちはさの、源さゑもんか、さん候、是こそいせんの大雪に、やとかりししゆきやうしやにて有、見忘れてあるかとのたまへは、左さゑもん大きにおそれ入てそ候けるさても先度なんちか申せしやうは、しせんたゝにて、かまくらと

の、御大事とてめされは、一はんにせまいらんと、しせうしたりしか、申つことはをへんせず、参りたるこそしんへうなれ、さて又たゝいま、兵ともをめすことは、我くに修行せし時、うたかはしきことの候はとに、人人をまねきのほせて候へとも、いまはそのこと聞なをして候へは、しよくむせいともは、國々にかへるへし、それにつきせうあらんともからは、このつるてをもつて申へし、りひにまかせてはからふへし

まつゝさたのはしめに、つねよか本領さの、庄八十よかうのところをは、たゝいま返しあたふるなり、又いせん大雪ふりてさむかりしに、ひさうせしはちの木をきり、たきひしてあてたるこゝろさし、いつの世にかは忘るへき、すなはち返報には、加賀に梅田、ゑつちうにさくら田、かうつけにまつえた、すへて三かの庄、子孫にいたるまで、さういあるへからするむね、あんとの状をしひつにあそはし、御判をすへて給けり

つねよあまりの有かたさに、うつゝとおほえず、すなはちみけうしよ三度いたゝき、御まへをたつてかへりけり、是をみて、はしめわらひける人々も、いまは浦やましくそおほえける、かのもろこしの朱買臣か、にしきのたもとを、くはいけい山にひるかへしけんうれしさも、いまのつねよか心の中にはよもまさらし

さて本國にたちかへり、年ころの本領八十よかうのぬしとなりければ、こゝやかしこにるらうせし、いゑの子らうとうはせ参り、ひはんたうはんをなし、いねようかつかうしたりけり、せんくはたきいゆるとはなけれども、山のことくにみち、子孫けんそくこゝろにしたかひ、ふつき栄花にたのしみたまへは、ふうふいまさらわかやき玉ふこそめてたけれ

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

絵 (七)

是と申も年ころ正直をむねとして、へつらふこゝろなかりしかは、神の御あはれみをかうふりたるにこそと、かのゆめをしんしつゝ、このゝちはいよく、しやけんのこゝろをすてゝ、正路をせんとしたまふほとに、よけいを家門にをよほし、るいとくを子孫につたへけり、寂明寺とのほまたつねよか身にかきらす、六十よ州いたらせたまふ、所々の人のよしあしをしるして、返らせたまふ事なれば、ひせんにはうら上さゑもん、津の國にあしやの藤栄などをはしめて、かれこれ一にめし出され、りひをけつたんし、しやうはつをおこなはれしかは、諸人いよくおそれたつとみ、國にはしゆこくし、所にはちとまりやうけ、かくしてもひかことをせさりけり

是によつて天下淳素にきし、万民いよくゆたかなり、かんと苔むし、鳥おとろかすことは、かやうの時をや申へき、ありかたかりしためしなり

解題

大東急記念文庫蔵。

絵巻、三軸。色絵二十図(上六、中七、下七)。

黒漆の箱に入り、箱の表に「はちの木」と金泥で書す。

各巻の表紙に題簽を付す。題簽は柿色地に金箔をちらした短冊形で、それぞれ「はち乃木とちのみき」と墨書す。

縦幅五一・三センチメートルの長巻。鳥の子紙に田園風景を描いた金泥の下絵がある。

絵巻「はちの木」(翻刻) (室木弥太郎)

折紙によると、信州松平家旧蔵、筆者不明。
近世初期の筆写らしい。

翻刻に当って、本文はすべて原本通りを旨としたが、読みやすくするため、改行し読点を付した。

漢字は原本に近い新旧の両字体を用いたが、例えば次の如き場合がある。

ハ……候

多……玉

ハ……国

また次の例のように、右傍の小書きは原本の通りであるが、後の付記と推測される。
はしりて

翻刻は大東急記念文庫の御好意による。記して感謝の意を表す。